

推理小説の枠を超えて

— 『ヴァロンゴ埠頭の犯罪』における記憶・歴史・霊的知—

武田千香

はじめに

エリアーナ・アウヴィス・クルス (Eliana Alves Cruz) は、1966年リオデジャネイロ生まれのジャーナリストとしても活躍する注目のアフリカ系ブラジル人作家の一人である。2015年に『灰汁 (Água de Barrela)』でデビューし、クルス自身の家族史をもとに、19世紀の奴隷制時代から現代までのアフリカ系ブラジル人の苦難と希望の歴史を描いた。2022年には長編小説『孤独な女 (Solitária)』と短編集『装い (Vestida)』を出版し、後者はジャブチ賞を受賞した。『孤独な女』では、高級マンションに住み込みで働く家政婦を主人公に、黒人女性が直面する社会的不平等や人種差別、自己解放への道のりを描いている。『装い』は、アフリカ系女性の視点から、人種差別や黒人のアイデンティティ、レジリエンスをテーマにした短編集である。

本論で扱う『ヴァロンゴ埠頭の犯罪 (O crime do cais do Valongo)』は、2018年に出版されたクルスの2作目の長編小説である。本作は、19世紀初頭のリオデジャネイロ(以下「リオ」)の港湾地区ヴァロンゴで起きた殺人事件の謎を追う、歴史推理小説仕立ての作品となっている。捜査は警務総監と混血の助手によって進められ、物語は彼のほか、容疑をかけられた黒人奴隷のムアーナという二人の語り手を通じて展開される。この小説は推理小説の体裁はとっているが、それを想定して読むと、どこか違和感を覚える。たしかに、冒頭で殺人死体が発見され、その事件の解明が物語の軸となる点では推理小説の構造を持つ。だが、捜査の進め方や事件解決のプロセスには不自然な部分があり、伝統的な推理小説の枠には収まらない。本作は、単なる事件の真相ではなく、より深い歴史的・社会的な問題を追究しようとしているのではないか。

本論では、『ヴァロンゴ埠頭の犯罪』が伝統的な推理小説の形式を借りながらも、その枠組みを超えて、19世紀ブラジル社会における黒人奴隷の現実や植民地時代の社会構造とその問題をどのように映し出しているのかを考察する。また作品の舞台となるヴァロンゴが持つ歴史的意義にも触れ、本作になぜ「推理小説」という枠組みが採用されたのか、またそれを通じて、奴隷制の記憶とどのように向き合おうとしているのかを探る。こうした分析を通じて、本作が単なるミステリー作品にとどまらず、植民地時代の記憶を再構築し、現在のブラジル社会における人種的・歴史的な問題を問い直す試みであることを明らかにしていく。



1. 推理小説としての『ヴァロンゴ埠頭の犯罪』

まずはヴァロンゴ埠頭で事件のあらましを見ておこう。

1.1. ヴァロンゴ埠頭殺人事件

ある朝、リオのヴァロンゴ地区の路地で「サン・セバスチアンで最も奇怪な死体」(9)¹が発見された。それを警務総監²パウロ・フェルナンジス・ヴィアーナ（以下「総監」）が険しい表情でみつめているところから物語は始まる。時は、ポルトガル王室がナポレオン戦争から逃れてブラジルに渡ってきたばかりの1808年だ。死体は大きさがぴったりのキルトに包まれて木箱に入れられ、腹にはナイフが突き立てられ、身体の二か所、具体的には片手の小指とペニスが切断されていた。被害者は、貿易事業で莫大な利益をあげ、その地区で宿屋「ヴァーリロンゴ」も営む実業家ベルナルド・ロウレンソ・ヴィアーナ（以下「ベルナルド」）だった。念願のマタカヴァーロ男爵の爵位をついに手に入れ、没落貴族の美しい令嬢エメレンシアーナとの結婚を間近に控え、まさに絶頂を極めんとしていた矢先の不幸だった。もともとは貧しいポルトガル移民だった彼は、数多くの不正を働いてその地位を築いた。ヴィアーナという姓に表われているとおり、総監とは遠戚関係にあり、それを利用して罰を逃れたのだった。

捜査は総監の許で、混血のヌーノが助手について行なわれた。総監は迷うことなく、まずは被害者の奴隷のムアーナ、ホーザ、マリアンノの3人に嫌疑をかけた。黒人奴隷は主人に恨みを抱いているもので、動機があるというのだった。たしかに彼らは全員取り調べで事件への関与を認めた。マリアンノは「私はベルナルド・ロウレンソ氏を殺しました」と言い、次のように続けた。

「あの汚い豚が路地で倒れているのを見つけたとき、私は即座にあいつのためにわざわざ縫ったキルトを取りに走りました。一針ごとに、私は思いを強くしたんです。いつかこの布で奴を包み、私の人生で最も忌まわしい顔を二度と見ずにすむようにしてやると。あるとき奴が眠っているあいだに身体のサイズをしっかりと測ったんです。そして誓った、このキルトが奴の身長と同じ高さになったら、奴は死ぬと。そして奴は死にました。私はその思いで、彼を殺したのです」。(147)

ホーザも言った。

「私はあの短剣を突き立てました。すでに死んでたってかまわない。私は、あいつが私の中に入ってくるのに使ったあの汚らしい武器を切り取り、私の料理を食らっていたその腹に、短剣を突き刺してやったんです」。(147)

最後にムアーナが次のように言って小指を見せた。

「私も旦那様を殺しました。あの男とその仲間たちが、他の人々に強いたのと同じ運命をあいつにも背負わせてやったんです」。(147-8)

だが実際にベルナルドの息の根を止めたのは彼ら3人ではなかった。成金のベルナルドと結婚することが本意ではなかったエメレンシアーナには、やはり名家の生まれの 아우セウ・コインブラという恋人がおり、犯行はその人物の仕業だった。婚約披露パーティー終了後にベルナルドはエメレンシアーナを家に送り届け、そのときに彼女を強引に抱き寄せようとして激しく抵抗されてしまう。そこへ突如現われたのがコインブラだった。ベルナルドは、そばにあった板でコインブラを力いっぱい殴りつけると、荷馬車で逃走した。コインブラが立ち上がり、その後を馬で追う。コインブラがヴァロンゴで追いつき、もみ合いの末、ついにコインブラがベルナルドの息の根を止めたのだった。

ならば3人の奴隷はなぜそのような証言をしたのか。彼らは、積年の恨みを果たすために、ベルナルドの息が絶えた後で、それぞれが述べた仕打ちを加えたということだった。

1.2. 推理小説らしからぬ推理小説

さて殺人事件を総監と助手が捜査する筋書きを見る限り、この小説は明らかに推理小説³を念頭に置いている⁴。それはヌーノの語りのタイトルを見ても明らかだ。「サン・セバスチャンでもっと奇怪な死体」と題された殺人事件発生を語る章で始められ、それ以降には「捜査」(33-39)、「捜査—第一の手がかり」(59-61)、「捜査—第二の手がかり」(75-80)、「捜査—容疑者ら」(97-98)、「捜査—第三の手がかり」(113-116)、「最初の結論」(133-135)、「第二の結論」(147-148)、「第三の結論」(157)、「最終結論」(171-174)とすべて捜査がらみのタイトルがつけられている。推理小説は、多少のヴァリエーションこそあれ、「物語のはじめで犯罪が起こり、それを探偵あるいは探偵役に相当する人物が捜査し、最後に犯人をつきとめる」という共通する構図を備えている[小倉 2002: 122]⁵。『ヴァロンゴ埠頭の犯罪』でも「死体の発見→捜査→結論」という過程が明確に示されており、この作品が推理小説を意識した作品であることは間違いない。

だがこの小説は、推理小説として読むと、粗雑で不完全な印象を抱かざるを得ない。なぜそのような印象を与えるのだろうか。

1.2.1. 捜査らしからぬ捜査

まず構造面から考えてみよう。通常、推理小説の読者は、なぞなぞやクロスワードパズルを解くように[鈴木 1976:21]、冒頭で提示された事件の謎を、物語の進行に沿って提供される手がかりをもとに作者と共に解いていく。この共同作業こそが推理小説の醍醐味である。しかし、『ヴァロンゴ埠頭の犯罪』の場合、その作業自体が成立しない。なぜならヌーノの語りは、題名こそすべて事件の捜査に関わるものをつけられているが、捜査らしい捜

査がほとんど描かれていないからだ。

別表は、ヌーノの語りのうち事件に直接関係する部分の概要である。一般的に殺人事件が発生した場合、警察は犯行現場の検証、証拠品の収集、聞き込みなどの捜査を経て被疑者を特定し、嫌疑が深まった段階で家宅捜索や逮捕に至る。同様に、推理小説の警察や探偵も事件の手がかりを収集し、犯人を絞り込んでいくプロセスを読者と共有することで、物語の面白みを生み出す。しかし、ヌーノの「捜査」には、このような過程がほとんど見られない。提示される「手がかり」も、例えばホーザが少女時代からベルナルドの奴隷だったこと、ベルナルドを包んでいた巨大なキルトを見た総監とヌーノが魔術の可能性を議論したことなど、決定的証拠とまでは言い難い。

さらに、総監が衛兵士官とヌーノを伴い被疑者宅を捜索した際には、被疑者の一人であるホーザの手料理を食べ、意識が朦朧となるという失態を演じている。現実の捜査では、被疑者が提供した食事を口にすること自体があり得ない行為であり、その結果、家宅捜索の目的は果たされなかった。もちろん重要な情報が皆無なわけではない。例えば、3人の奴隷が婚約披露パーティー後に別邸の片づけを命じられ、実際にそうしたこと、マリアンノが裁縫に長けていたこと、炊事場にナイフのコレクションが飾られていたことなどが明かされる。別邸にいながらベルナルドを殺すことはできなかったはずだし、キルトはマリアンノが作ったものかもしれない、またベルナルドの腹を刺したナイフはそのコレクションから持ち出したものだったのかもしれない。しかし、それらに関する追加の捜査が進められた形跡はなく、むしろ「ベルナルドの小指がなぜ切り落とされていたのか、総監には見当もつかなかった」(80)といった頼りない記述ばかりが目立つ。

「捜査—被疑者」に関しても、被疑者が明確に特定されることはない。総監がヌーノに被疑者の心当たりを尋ねる場面では、「脂ぎった、ケチ臭い、詐欺のような、ゆすり屋で、怒りっぽく、残忍で、恥知らずなベルナルド」のことだから「サン・セバスチャン・ド・リオ・デ・ジャネイロ全体 [が被疑者] だ」(97、カッコ内は筆者)と答える始末である。さらに、ヌーノ自身も被疑者の一人とされている。というのも、ヌーノは被害者ベルナルドに多額の借金があり、借金取りに脅されていたからだ。被疑者は絞られるどころか、広がるばかりである。加えて総監がまずベルナルドの3人の奴隷に容疑をかけた根拠が、「黒人は主人に恨みを抱くため、最初の容疑が黒人にかかるのが常である」という偏見に基づくことされており(39)、客観性をまったく欠いている。

推理小説は、犯罪の謎を解決するために、いくつかの特殊な経験的事実から一定の共通点を見出し、それを体系的に説明する方法(帰納)と、一般的な前提から論理の規則に従い個別の事実を導き出す方法(演繹)の両方を駆使する[小倉2002:151]。推理小説は、そのように論理性こそを基本構造とするべきだが[ヘイクラフト1992:282]⁶、総監とヌーノの捜査にはこのいずれも欠けており、論理性がまったく認められない。

では、このような捜査の末にヌーノはどのような結論を導き出したのか。別表からも明らかのように、結論として示されるものは、犯罪捜査としての的外れなものばかりである。「最初の結論」は、ヌーノがホーザの料理を食べて意識を失い、ムアーナが「私は死者と話します」と発言したことなどから導かれた、「彼ら(奴隷)3人は総監よりも力を持っている」というものだ。しかし、これは犯人の特定には結びつかない。「第二の結論」にも結

論らしい結論が見当たらない。書かれているのは、マリアンノもムアーナもそれぞれ自分が殺したと言っていることと、死体にあった奇怪な痕跡は3人の奴隷が加えたものであることを示す証言だ。事件現場にいなかったはずの3人が、なぜそんな証言をしたのか、その謎を追及することすらしていない。「第三の結論」は「人は見かけによらない」という抽象的なもので、取り調べ時に3人が冷静だったことから導かれたが、事件解明には何の貢献もしない。

「最終結論」では、「明白で常識的な」と「より洗練された」ものの2つが提示される。「明白で常識的な」結論は、「すべてを欲する者はすべてを失う」というものであり、大富豪との結婚を望んだエメレンシアーナの失望に基づいている。しかし、これは心理的結論であり、事件捜査の結論とは言えない。「より洗練された」結論に至っては明確に提示されず、ただハムレットの「There are more things in heaven and earth, Horatio, than are dreamt of in your philosophy.」(174)の台詞を中心にその場面が引用されているだけである。現実や理性だけでは説明不可能な謎や神秘は存在し、未知なるものを拒まず受け入れるべきだと言いたいのであろうか。だが、これも犯人の特定や事件の解明にはつながらない。

結局、捜査は迷宮入りし、総監が晩年に「結局、私の親戚（プリーモ）は誰に殺されたのかね」(189)とヌーノに問いかける場面に象徴されるように、事件は未解決のままとなる。『ヴァロンゴ埠頭の犯罪』は「事件→捜査→結論」という推理小説の典型的な構成を持ちながら、その実態は推理小説とされるものの要件を満たしていないのである。

1.2.2. 推理小説的読解の限界

では、内容についてはどうか。事件の真相は、結局総監とヌーノの捜査では犯人が絞り込めず、最終的に被疑者ムアーナの語りによって明かされる。ムアーナは「肉体と精神」の章で、ヴァロンゴでのベルナルドとコインブラのもみ合いについて、次のように描写している。

私たちが〔ヴァロンゴに〕到着したのは彼らより先だった。馬に乗ったアルセウ〔・コインブラ〕の方が速く、ベルナルドに追いついた。雨は止んでいたが、通りは悲惨な状態だった。二人は泥の中に倒れ込んだ。ベルナルド氏はぬかるみを這って逃げようとした。もう一人が彼の足をつかんだ。何度も殴り合い、まるで大きな豚小屋のぬかるみで泥まみれになる豚のように転げ回った後、アルセウがついにベルナルドを押しえ込み、埠頭で首を絞めて致命的な一撃を加えた。〔カッコ内は筆者〕(177)

これはコインブラによる殺害の目撃証言と言える。しかし、ここで一つの疑問が浮かぶ。第二の手がかりにあったように、この時間にムアーナは現場にいなかったはずだ。それなのに、なぜこの場面を詳細に語る事ができたのか。この理由は、ムアーナ自身が述べている。

私は、その出来事の一部始終を、あの世の行列に連れられて、霊の状態で見守った。ホーザとマリアンノも同様に、鬱積した怨念に駆られ、宿で総監やヌーノ・モウチーニョ氏と衛兵士官に言ったことを実行した。私たちの肉体は、パウロ・フェルナンジスが私たちに罪を被せないようにいるべき場所にいた。だが私たちの魂は、その筋書きが完結するために必要な場所にいたのだ。(177-8) [下線は筆者]

つまり、事件を目撃していたのは彼女の「霊」であり、ムアーナやホーザ、マリアンノの「肉体」は総監の目を逃れるために別邸にいたことになる。彼女の目撃証言は「肉体」としてではなく、「霊としての目撃」したものだっただけだ。

さて内容面でもこの小説は、推理小説の要件から外れている。なぜなら推理小説に超自然的な能力を持ち込むことは厳禁だからだ。一般的に推理小説は「主として難解な秘密が、論理的に、徐々に解かれていく経路の面白さを主眼とする文学」[江戸川 1974:27]と認識されている。事件の解明が超自然的な要素に依存してしまうと、そこに論理的な謎解きの魅力はない。読者が知的ゲームとしての推理を期待するならば、この作品は大きくその期待を裏切ることになり、興ざめしてしまうだろう⁷。

以上のようにこの小説が一般的な推理小説の枠組みから外れることをふまえると、そもそもこの作品がベルナルド殺人事件を通して読者に求めていることは、その犯人の特定ではなく、もっと別のところにあるのではないかという疑問が浮かぶ。むしろ推理小説という枠組みで解釈しようとする、この作品の本質を見誤らせてしまうのではないか。ウゼーダも「この観点 [筆者註：推理小説] から作品を読むのは矮小化することになる」と述べている [UZÊDA 2018: 1-2]。では、この小説の本当の狙いは何なのか。なぜわざわざ推理小説という枠組みが採用されたのだろうか。それを解くカギとなるのが、事件の舞台であるヴァロンゴだ。

2. 人類史上最大級の犯罪

2.1. ヴァロンゴ

ヴァロンゴは、ブラジルで最も悲惨でありながら、これまであまり語られてこなかった歴史の舞台である [Hypotheses]。ブラジルはポルトガルの植民地となって以来、ヨーロッパへの第一次産品の供給地として国際経済の枠組みに組み込まれ、その労働力を確保するために多くのアフリカ人が奴隷として連れてこられた。17世紀末にミナスジェライスで金が発見されると、経済の中心が南東部へ移り、港湾都市リオの重要性が増し、1763年に首都がサルヴァドールからリオへ移された。1760年代に奴隷貿易が民間主導で行われるようになると、金の採掘用の奴隷の需要も相まって、リオでの奴隷貿易の中心的な役割が一層強まった [HONORATO 2008: 64]。実はブラジル(1822年の独立まではポルトガル)は、世界でも有数の奴隷導入地域だった。アフリカから連れてこられた奴隷の約40%がブラジルに送られ、そのうちの約半数がリオを經由して、ブラジル南東部に送られた⁸。

当初、リオに送られた奴隷たちは、ラルゴ・ド・パッソ (現プラッサ・キンゼ) に上陸し、

ジレイタ通り（現プリメイロ・ジ・マルソ通り）で取引された。しかし町の発展に伴い、副王宮殿もある行政や商業の中心地に奴隷を上陸させる場所としてはふさわしくないとの声が上がった。特に懸念されたのが、奴隷が伝染病を持ち込むという衛生上の問題で、その結果、新たな上陸地として選ばれたのがヴァロンゴだった。1766年には都市部での奴隷売買の禁止令が出され、それ以降ヴァロンゴが奴隷の中継地点として機能するようになった。ヴァロンゴでは、奴隷たちは検疫を受けた後、市場へ送られた。市場には、長旅で衰弱した奴隷を「売れる状態」にするための「肥育場」(Casa de Engorda)も併設されていた。過酷な状況に耐えられず、「売られる」前に死亡した者は「新黒人墓地 (Cemitério dos Pretos Novos)」に葬られた。またヴァロンゴには、奴隷たちを一時的に収容する荷揚げ場 (trapiche) や倉庫 (armazem)、貿易従事者向けの飲食店や宿泊施設などが整備されていた。つまりそこには奴隷の到着から検疫、売買、管理、埋葬までの一連のプロセスを支える複合施設 (complexo) が整備されていたのだ。奴隷たちは売られるまでヴァロンゴから一步も外に出ることを許されなかった。1831年に奴隷貿易が表向きに禁止されるまでのわずか57年間で、100万人以上の奴隷がここを通過した [Hypotheses] 。

2.2. ヴァロンゴと新黒人墓地

ムアーナは語りの中で、折に触れてヴァロンゴに言及している。海岸線には「倉庫や事務所がぎっしりと建つ多くの入り江や小島があり」、家という家のほとんどが「売るための人間」(15)の倉庫だった。ムアーナ自身が降り立ったのも、このヴァロンゴだった。倉庫については、次のように描写されている。

何十という単位で、人々がネズミなどの動物だらけのものすごい悪臭の倉庫に詰め込まれ、腐った残飯を食べている。傷だらけで、ものすごく痩せ細っていて、この窓ガラスを揺らす風でも彼らを故郷へと連れ返してしまいそうなほどだ。(44)

ムアーナは、自分が配置された7番倉庫の悲惨な状況についても語っている。そこでは、「黒人たちは所有者別に積まれ」(164)、腰につけた布や髪型で所有者が識別されていた。時には黒人が踊るための音楽が流されたが、それは彼らの娯楽のためではなく、自殺を防ぐため、つまり商品としての価値を維持するためだった。排泄の場所も決められておらず、倉庫内は強烈な悪臭に満ち、不慣れな者は気を失うほどだった。

この倉庫では、奴隷たちは「2、3人のグループに分けられ」(150)、競売にかけられる家具や台所用品、布地などと一緒に保管されていた。時折、司祭も現われ、彼らの間を歩き回りながら洗礼を受け、霊名をつけ、祈りを文字通り鞭で叩きながら教えた。病気の兆候が現れると、「乗用馬の世話をするような医者が呼ばれた」(165)。検疫所についても「死ぬ以外に術がなかった者が死んだ。生きられる者だけが生きた。死体は束になって出ていった」(150)とムアーナは語っている。肥育場については、さらに次のようである。

大きい検疫所は裕福な商人のためで、小さいものもあり、それは不適合とされた者のた

めだった。死の手前に留め置かれた者たちだ。このような人たちを扱う商売もあった。彼らは二束三文で買われ、買った商人は回復させた後、転売して利益を得た。まるで屠殺直前の牛や豚のように食べ物をたらふく与えた。たとえ病気で呑み込めなくとも、腹痛で死にかけていてもお構いなしだった。(164-5)

彼らは獣のように扱われ、人間としての尊厳を奪われていたのである。

その象徴が新黒人墓地だった。先述したように、そこはブラジルに到着したものの、生き延びることができなかつた者たちが埋葬された場所だ。とはいえ実態は「埋葬」と呼ぶにはほど遠く、大雨が降ると、「死体が露わになる」(163)ほど杜撰だった。このため、辺り一帯には窓を開けられないほどの汚臭が漂い、鬼気迫る空間となっていた。ムアーナも、「足を運ぶ勇氣はなく」「行きたくも」「見たくもない」(162)場所だと記している。また、ヌーノも「酔っぱらってでもいなければとても耐えられるものではない」(77)と述べている。ヴァロンゴは、奴隷制度の残虐性を今に伝える証言者であり、数えきれない人々の苦しみと絶望の記憶を宿している。

そんな環境でも、ベルナルドはそこで商売を続けることにこだわった。リオ有数の実業家としての地位を築いた彼は、「その地位に見合う」(159)場所への引越しを計画しつつも、宿屋「ヴァーリロンゴ」を閉めることは考えなかつた。というのも彼が扱う商品とは、ほかでもない奴隷だったからだ。「窓を閉め切りローズマリーの香りを漂わせ」(159)、新黒人墓地の鼻をつんざくような臭いを押してでも、そこに留まり、奴隷貿易従事者の「宿泊や食事、あるいはその両方」によって莫大な収益を上げた。「彼の富は商売の場への近さゆえだったからだ」(64)。これは何もベルナルドだけの話ではない。ムアーナは、「アクヤ(白人)らの頭には金しかない。レイス、パタッカ、ドブラオン¹⁰。ヴァロンゴには、私たちが元手に利益を得るためのあらゆる形式が揃っていた」(164)と述べている。ポルトガルによって築かれた奴隷制度のもとで、白人たちはアフリカの黒人から人間としての尊厳を奪い、強制的にブラジルへ連行し、獣やモノ同然に扱い、富を蓄積するための道具として利用した。ベルナルドは、まさにその「アクヤ(白人)」の象徴ともいえる存在だった。

2.3. 奴隷たちの復讐

搾取は単に労働力としての酷使にとどまらず、拷問や性的搾取にも及んだ。ムアーナの手記には、体罰を受けたナタニエルという黒人少年のエピソードが記されている。彼は、自分の自由を買うための小遣いを稼ぐため、主人に無断で別の商人の品を売った罰として、全身に蜂蜜を塗られ、灼熱の太陽のもとに晒された。火傷を負うほどの暑さに苦しみ、蜂蜜の匂いに引き寄せられた蜂や蚊の標的にもなった。さらに苛烈な処罰で悪名高い農園では、黒人奴隷ジョアキン・マニ・コンゴが同性愛の廉で釜茹での刑に処された。主人の息子を相手としたために極刑を受けたのだった。

ベルナルドのもとでも体罰は日常茶飯事だった。ホーザは、奥方から「木さじで叩かれたり、焼かれたり、傷を負っていた」(63)。しかし、3人の奴隷たちにとって最も屈辱的だっ

たのは、ホーザが初潮を迎えるなり、ベルナルドに手籠めにされたことだ。ホーザを妹のように思っていたマリアンノにとっては耐えがたい現実だった。一度はベルナルドを殺して復讐しようとしたが、それをしたら全員の破滅を招くだけだと必死に止めるムアーナの説得を受け、代わりに始めたのが「彼のキルトを縫う」(67) ことだった。

もうおわかりだろう。ホーザが「あいつが私の中に入るために使った汚れた武器」(147) としてペニスを切断したのも、マリアンノがキルトを作り、その中にベルナルドの死体を包んだのも、彼らの怨念による復讐だったのだ。ポルトガル語では「食べる」という意味の動詞 *comer* には「性的な関係を持つ」という意味もある¹¹。それを念頭におけば、ホーザの「私の料理を食べていたあの腹に短剣を突き刺してやった」(147) という言葉に込められた憎しみの深さがより明確になる。ヌーノが「第二の結論」として提示したのはこのことだ。つまりこの小説で重要なのは、ベルナルド殺害の犯人の特定よりも、彼が受けた仕打ちのほうなのだ。奴隷制度の象徴であるヴァロンゴで、白人を代表するベルナルドに対して、復讐が実行されたことにこそ意味がある。

そしてそれは単なる個人的な復讐を意味するものではない。ヴァロンゴという場所は、すでに述べたように、黒人奴隷たちが売買され、暴力に晒され、命を落とした場所だが、それをブラジル全体に敷衍してみれば、歴史の中で数えきれない「ベルナルドたち」が存在し、同様に、ホーザのように白人の男たちに性的慰みの対象とされた女性も無数にいた。ヴァロンゴでのホーザ、マリアンノ、ムアーナの行動は、彼ら自身が受けた苦しみを跳ね返す象徴的な出来事であり、単なる個人的復讐を超えて、ブラジルの歴史全体の文脈に位置づけられるものなのだ。

2.4. ヴァロンゴ埠頭の犯罪

ヴァロンゴの埠頭は、奴隷貿易の公式な廃止とともに使用されなくなった¹²。しかしその後、皇妃をヨーロッパから迎えるために、「きれいに磨かれ、均整がとれ、そして綿密に積み上げられた石で」(195) 新装された。それは、まるで過去の記憶を消し去ろうとするかのようなのだ。

小説の最後で、ヌーノはその光景を眺めながら、かつて黒人少年の足が踏みしめた石畳の棧橋を見ながら、「我らが冷酷な太陽王のもと、糞尿と傷と孤独が列を成して歩いて」(195) いく光景を思い浮かべ、次のように呟く。

それこそが、ヴァロンゴ埠頭の真の犯罪なのだ。その代償が払い終えられるまでには、きっといくつもの時代がかかることだろう。(195)

そう、ヴァロンゴという場所が孕む歴史的な暴力、ヴァロンゴの地で展開された奴隷貿易と奴隷制度、そして奴隷貿易の傷跡を覆い隠し、忘却しようとする行為そのもの、まさにそれこそが「ヴァロンゴ埠頭の犯罪」なのだ¹³。そう考えると、この事件が未解決のまま終わっていることにも大きな意味がある。それは、ブラジル社会における奴隷制度廃止の不

完全性とも重なるからだ。ブラジルの奴隷制度廃止には根本的な問題があった。法的には解放されたものの、元奴隷たちに対する支援はほぼ皆無で、社会への統合政策も実施されなかった。彼らは、何の補償も賠償も受けないまま放置され、教育や職業訓練の機会を得ることもなく、社会の周縁へと追いやられた。そして貧困の連鎖と人種差別に苦しみ、それは現在に至るまで続いている。ベルナルド殺害の未解決性が象徴するもの、それはまさにこの構造的な放置だ。つまりこの小説が「推理小説」の体裁をとって明らかにしようとするのは、ベルナルド殺人事件の犯人ではなく、ポルトガルとブラジルが犯した歴史的な重大な犯罪の真相なのだ。ヌーノが手がかりや結論として提示したのも、ベルナルド殺人事件の解明のためではなく、その歴史的犯罪を暗示するものだったのだろう。

さて「第二の結論」として提示された3人の奴隷の証言のうち、マリアンノとホーザの仕打ちが白人の暴力に対する復讐であることはすでに見た。だが、まだ一つ解けていない謎がある。ムアーナが切り落とした小指である。小指は、ムアーナのアフリカに関する記憶と深く結びついている。先述したように、この小説はヌーノの語りとムアーナの語りが交互に置かれている。ムアーナの語りは、その多くの部分がモザンビークからブラジルへ奴隷として連れてこられた経緯に充てられている。次章では、ムアーナの回想に焦点を当て、小指の謎に迫っていこう。

3. 歴史告発小説としての『ヴァロンゴ埠頭の犯罪』

3.1. アフリカの回想

ムアーナの語りは、奴隷制廃止論者のイギリス人教師のミスター・トゥールが実施するブラジルの奴隷制度の実態に関する聴き取り調査に答える形で綴られている。

ムアーナはモザンビークで二番目に高いナムリ山の麓の村で生まれたマクア・ロムエ族の娘で、本名はムアーナ・ロムエといった。10歳になろうとしていた頃、その一帯ではポルトガル人、カスティーリャ人、オランダ人、インド人、イスラム教徒などの多様な人々が勢力を拡大し、ムアーナの部族は、彼らと密接に商業活動を行っていたマラヴェ族や沿岸部のマクア族に圧されて土地を追われ、森の奥へ逃れた。奴隷貿易の拡大に伴い、侵略者らは隊商を組んで奥地へ進出し、各地の首長たちに大量の武器を供給することで地元の対立を煽り、奴隷狩りを助長した。「人間は、象牙や銅、金と並ぶ、いやそれ以上の価値のある財宝だった」(50)からだ。ムアーナの村も巻き込まれ、外国勢力との仲介を手がけるファルクから、火酒、ゴム、塩、煙草、銅、武器などを見返りに人身売買の拠点となるよう迫られたが、それを断固として拒否したのがムアーナの父親だった。そのため、一家は村を捨てて逃亡することを余儀なくされた。

一家はムスリムの隊商に紛れ込み、沿岸の都市ケリマネへと向かったが、そこはポルトガル商人がアフリカ人をブラジルへ奴隷として移送するための拠点港であった。父親は便宜上イスラム教に改宗し、徐々にその宗教を自然に受け入れるようになった。だが、母親のほうは密かに自分の信仰を守り続け、ムアーナが初潮を迎えると、伝統的な入門儀式を執り行なった。式の当日、母親はムアーナが恋人のウンプーラとも結ばれるように、二人

を置いて一足先に帰宅する。だがムアーナが帰宅すると、家族全員が拉致される場所だった。入門儀式が原因で母親は「異端の呪術師」(107)として密告されたからだった。母親は抵抗の末、服の中から短剣を取り出し、自らの腹に突き刺し、自害をした。

ムアーナとウンプーラはカトリックの修道院に身を寄せ、しばらくの間、修道士たちの世話係として働いた。しかしある日、二人が密かに会っているところを発見されてしまう。咎めを受けたムアーナは、思わず院長が同性愛者であるという秘密を暴露してしまふ。その罰として、二人は「カーザ・ド・リオデジャネイロ」の倉庫に監禁される。食事が与えられたのは3日目で、それは彼らが「商品」(123)として扱われるようになったからであった。やがて焼印を押され、ほとんど衣服も身につけないまま、傷だらけの状態で暗く悪臭漂う薄暗い部屋へ押し込められた。そこで彼らは長らく行方不明だった父親と再会する。しかし父は、かつて二人の息子を病で亡くして以降、精神を病み、言葉を失っていた。

その後、ムアーナとウンプーラは200人以上のアフリカ人とともに奴隷船「ハッピーデー号」¹⁴の船倉に収容され、リオデジャネイロに到着するまでの6か月、まさに地獄の旅を送ることになる。出航後10日ほどすると、船内では天然痘等の感染症が猛威を振るい、多くの人が命を落とした。「船長は迷うことなく、その『積荷』を、ほかの荷に感染させないために海に投げ捨てた」。ムアーナの父もその一人で、まさに奴隷船は「死の船(tumbeiro)」であり、海は「世界最大の墓場」(138)だった。

こうして、辛うじてリオデジャネイロまで生き延びたムアーナが送り込まれたのが、先述の第7倉庫であった。彼女はベルナルドの奴隷にされ、ウンプーラとは生き別れになった。ウンプーラはその直後、連れていかれるムアーナを見て大声で叫び、それが原因で撃ち殺されてしまった。ムアーナがその事実を知るのは後になってからだ。このようにしてムアーナは、アフリカを発ってブラジルに辿り着くまでの間に、両親、二人の兄弟、そして恋人と、身内のすべてを失った。しかしブラジルの地で、彼女はその全員と再会することになる。これはどういうことか。それを次節で見よう。

3.2. バントゥ文化の宇宙観と先祖との霊的つながり

ムアーナの生まれ故郷が属するバントゥ文化圏では、可視の世界と不可視の世界が共存すると考えられている。世界は、生のエネルギーが織りなす網のようなものであり、「生きとし生けるものは、誕生・死・再生を繰り返しながら、絶え間ない交流のリズムの中にある」(ALTUNA 1985: 51)。また、「先祖から受け継いだ血と命を通じて、個人は家族・共同体に統合され、宇宙とのつながりを感じる」(Ibid.: 53)。こうして、宇宙全体が密接につながり、動植物だけでなく、石などの無生物も「鉱物」としてエネルギーの循環の一部を担っているとされる。ムアーナは、リオにおいても目を閉じることで故郷に立ち返り、自然と一体になることができた。

私は、内なる情景を見ようとして目を閉じた。すると(…)鮮やかに浮かび上がった。故郷の諺に「魂を失うより視覚を失う方がまし」とあるように、私はいつもこの同じ時

間に（…）目が覚ます。なぜならそのほのかに明るい夜空が、このほとんど澄み切った闇を通して、魔法のようなひとときのなかで、私の精神に故郷の村の姿を映し出してくれるからだ。そこにはただ三つのものしか存在しなかった。果てしなく緑に広がる湿った大平原、耳が痛くなるほどの静寂、そして風景を支配するひとときわ高い山。ナムリ山のふもとに幾度も降り注いだ大雨のあとに広がる新鮮な空気を、私は今も感じる。あの感覚を、私は決して忘れない。そして、水分をたっぷり含んだ大地と自然の匂いが溶け合ったあの香りも。(44)

ムアーナは、村の人々がナムリ山の地母神ニペレの子孫であると信じており、自らも「山の娘」(45)と称している。そうした夜、彼女のもとには「先祖のもとへ帰れなかった者たち」が訪れる。ムアーナが体験する「再会」とは、そうした霊的な訪問者たちとの交わりを指していた。彼らは「自分たちの苦悩を語り、いくつかわらせを残し、日が出る前に霧の中へ去っていった」(26)。その中には、かつて釜茹でにされたマニ・コンゴもいて、ムアーナに「先祖の世界の平和」(23)の実現を託してきた。これは、彼らにとって「死は存在しない」とされ、「先祖と共に別の場所で生き続ける」(138)と考えられていることと深く関係している。ムアーナはこう語る。

私たちは先祖たちと共に生き、つながり合っているんです。死は終わりではありません。(48)

バントウの人々にとって、死とは生の終焉ではなく、その在り方の変化にすぎない。肉体的な死を迎えた後、生命は子孫へと引き継がれ、共同体や家族の一員として記憶されることで存続する [ALTUNA 1985: 433-5, 451]。

この世界観において生命は神秘的かつ魔術的なものであり、生命同士の相互作用によって秩序と調和が生み出される。そして調和が保たれることで、平和な生活や穏やかな暮らしが実現されると考えられている [ALTUNA 1985: 54]。人々は、この調和を保つために、生命の結びつきを強化しようと努め、先祖や呪術師、精霊がその均衡を崩し、調和を乱すことを最大の脅威とみなす [ALTUNA 1985: 53-54]。至高神も存在するが、その至高神と人間の仲立ちをするのもまた祖霊である [LOPES 2023: 147]。

ところがマニ・コンゴはその生命の循環に入ることができなかった。なぜなら彼に必要な「尊厳ある埋葬」がなされなかったからである。その結果、彼は「もはや自らの住処には戻れず、生者の世界を彷徨いながら、人々を苦しめ続ける存在となった」(138)。ムアーナのもとに訪れていたのは、そうした「先祖の許に帰れなかった者たち」(26)だった。

まだ十三回目の梅雨を迎えただけなのに、私にはすでに二人の宿なしの先祖がいて、この苦しみの大を彷徨っています。そのことが私の心を針のように突き刺し、今も私の精神を蝕み続けています。彼らは、行くに行けなかった者たちの一団とともに私の前に現われ、懇願するのです。けれど私は、彼らが私たちの長老たちの家を見つけられるためにどうすればいいかが、わからないのです。(138)

前述のように、バントゥ文化では死は再生の過程であり、葬儀は「通過儀礼」とされる [ALTUNA 1985: 433–434]。葬送儀礼を通じて死者は先祖となることができ、その最大の目的は、死者を正常に死後の世界へ移行させることだ [ALTUNA 1985: 438]。適切な葬儀によって初めて、死者は「先祖の世界」に定着し、その地位を得る [ALTUNA 1985: 452]。逆に葬儀が伝統や先祖の意思に反して適切に執り行われなかった場合、死者は彷徨い続け、生者に害を及ぼす可能性がある [ALTUNA 1985: 439]。こうした背景の中で、ムアーナは彷徨う者たちの声を受け止め、適切な葬儀を行い、彼らを先祖の世界へ送り届ける使命を担うことになる。彼女は、ヴァロンゴと中心街の地理的空間を結ぶ存在であると同時に、可視と不可視、現世と霊界をつなぐ架け橋でもあった。

その使命は、ベルナルドの殺人事件が迷宮入りし、総監がこの世を去り、ブラジルの独立後、コインブラはポルトガルへ帰還し、エメレンシアーナが修道院に入り、ホーザが高級ホテルの料理人となり、マリアンノはアフリカへ旅立ったのち、あらゆる事態が一段落したときに果たされる。ムアーナは、人手に渡ったヴァーリロンゴへひとり舞い戻った。

ある考えがふと浮かんだ。私は裏庭に行き、土に穴を掘り、手許にあるわずかなもので彼ら全員のための象徴的な埋葬を行なった。すると彼らがやってきた。酋長が手を上げると、彼の指が元の位置に戻った。私の家族が集まり、抱き合い、父はマスハバを手に、メッカの方角を向いてひざまずき、祈りを捧げていた。(191)

ムアーナの行った象徴的な埋葬によって、ようやく彼らは先祖の世界へ旅立つことができた。とりわけ注目すべきは、酋長の指が元通りになったという記述である。この象徴的な変化は、ムアーナが背負ってきた傷の癒しと、先祖たちの救済を意味しているのだろう。このことは、ムアーナ一家がまだアフリカに至途に起きたある出来事と関係がある。次節ではその意味について考えていこう。

3.3. 小指の復讐

ムアーナの一家が故郷の村を離れざるを得なくなった背景には、酋長ソバ・ママトゥンドゥの突然の死があった。バントゥ文化では、老齢になり、子孫に囲まれて迎える死は自然死であり、幸福な死とされる。それ以外の死は異常な死と見なされ、生命の流れが暴力的に断ち切られたものとされて、多くの場合、呪術の影響と受け止められる [ALTUNA 1985: 435]。酋長の死は、まさにそのような死だった。ムアーナは「老齢でもなく、元気なのに、目を覚まさないのは、何者かに標的にされたとしか思えない。呪術で (…) まさにそのせいだと即座に疑われた」(84) と述べている。そのため、酋長の死に関与した呪術師の特定が進められ、同時に適切な葬儀の準備が行なわれた。

遺体はごごの上に横たえられ、その下に物質が沈殿するように瓢箪が置かれた。内臓は取り除かれ、身体が完全に乾いて骨だけになるまでそのままにされた。この全工程が常

時番人によって見張られていた。というのも呪術師たちが遺体の一部を盗み出す可能性があったからだ。とりわけ酋長の骨の場合、そこに強力な呪術がかけられるかもしれない。この工程は骨が現われるまで最大で二週間続き、最後には埋葬されて、死者は先祖の土地に安らかに旅立つ。その間は全員が籠って過ごす。なぜなら、彼——酋長——はまだ私たちのところにいるからだ。(85)

しかしこの過程で、右手の小指の骨が何者かに奪われていたことが判明する。この事態によって、番人が呪術の罪に問われる可能性が浮上した。ウンプーラの証言によれば、酋長を殺したのは、ムアーナの父親と対立していたファルークであり、彼が番人の一人を買収して骨を盗ませたということであった。だが、父親も番人の一人であったため、身の危険を察知し、即座に村を離れる決断を下した。

ベルナルドの小指が切り落とされていたことは、このことに起因している。ムアーナの父は、酋長の小指の骨を盗んだ罪を着せられ、命を狙われ、村から逃亡するほかなかった。ムアーナたちの苦難は、まさにこの事件から始まる。彼女はこの出来事を「私たちの運命の分岐点」(43)と語っている。ここで「私たち」としているのは、彼女の個人的な体験にとどまらず、アフリカから強制連行された人々全員への意識を含んでいるからだろう。それはムアーナ自身が、ベルナルドの小指を切り落とした理由について、「あの男とその仲間たちが、他の人々に強いたのと同じ運命をあいつにも背負わせてやった」と言っていることから明らかだ。この小指の切断は、ベルナルドをはじめ白人たちが黒人たちに強いてきた苦難への歴史的な報復を象徴する行為であったといえる。最後にムアーナが、ヴァーリロンゴの裏庭でこの世で彷徨っていた黒人たちを象徴的に埋葬したとき、酋長の指は元どおりになった。だが、ベルナルドの指は、箱から取り出され、土に埋められたにも拘わらず、「それをしても浄化されることはなく、また酋長とは違い、元に戻ることはなかった」(192)と記されている。奴隷貿易と植民地主義の罪の償いは、いまだ終わっていないのである。

4. 『ヴァロンゴ埠頭の犯罪』が描くもう一つの真相と歴史

4.1. ヌーノの手がかりと結論が意味するもの

以上のように、奴隷制度という歴史的犯罪を追及する小説として本作を読むと、一見ベルナルド殺人事件の解明には何の役にも立たなかったような手がかりが、実は見事に結びついていたことがわかる。これまで見たもの以外にも、たとえば容疑者について心当たりがあるか問われた際にヌーノが「リオデジャネイロ全体だ」と答えたことや、第一の手がかりとして、ムアーナが死体の異常な状態について「悪党の仕業だ」と答えたこと、そしてホーザが幼少期からベルナルドの「所有物」であったことも、この小説が告発する犯罪が奴隷制そのものであることをふまえば、深い意味を持ってくる。奴隷制にはリオ全体が関与し、白人は黒人たちにとっては「悪党」であり、ホーザの復讐はベルナルドによる長年の支配と暴力に対するものだった。

とはいえ、ヌーノの挙げた手がかりや結論の中には、まだその意味が見えにくいものもある。ここで彼が提示した結論を改めて整理してみよう。

- ① 最初の結論：誰ら3人は総監よりも力を持っている
- ② 第二の結論：3人の奴隷がそれぞれのやり方でベルナルドを殺したと自白。
- ③ 第三の結論：「人は見かけによらない」
- ④ 最終の結論：a. (常識的なもの)「すべてを欲するものはすべてを失う」
b. (洗練されたもの)「現実や理性だけでは説明不可能な謎や神秘は存在し、未知なるものを拒まず受け入れるべき」

②についてはすでに見た。また④aは、ヌーノの指示どおり「常識的」に解釈すればよく、恋人と富という二兎を追った末に何も得られなかったエメレンシアーナの結末から素直に導ける。一方で、①と③と④bに関しては、殺人の手がかりというよりも、この小説の主題を考えるうえで重要な示唆を含んでいる。

可視の世界の力では解決できなかった事件の真相を、ムアーナが明らかにできたのは、まさしく不可視の世界に生きる先祖や同郷の人々の力によるものであった。まさにヌーノの導き出した④bのとおり「現実や理性だけでは説明不可能な謎や神秘は存在し、未知なるものを拒まず受け入れるべき」なのだ。また①についても、たしかに3人は総監より力を持っていた。マリアンノは死期に合わせてキルトを完成させ、ムアーナは祖霊たちと交流でき、ホーザは料理によって人の死期を早めたり隣人の病も治したりする力さえ持っていたと書かれている。彼らは可視と不可視、両方の世界を扱える者たちであり、可視の世界に限定された総監とは異なる強さを備えていた。無力な奴隷に見えた彼らが、実は強力な存在だったことを③の「人は見かけにはよらない」が示しているのではないか。

4.2. 推理小説という装置

こうした構造に、作者クルスの問題意識が読み取れる。本来、推理小説というジャンルは、近代合理主義や科学主義の発展、警察制度の確立といった西洋的近代の枠組みと深く結びつき、超自然的な要素を排することが前提とされた。そんなジャンルにあえて不可視の世界＝祖霊や霊的知を持ち込んだことには、西洋的価値観一辺倒の近代化が、祖霊とされた人々の文化的叡智や伝統をいかに排除してきたかへの批判が込められている。

クルスは、あるインタビューで「学界は、単一の知識観から脱却する必要がある」と述べている [Observatório de favelas]。ウゼーダも本作について「謎を合理的・演繹的な論理で解明しようとする試みは、小説全体が実際に表しているものを空っぽにしてしまう」 [UZÊDA 2018: 4] と評している。

一方、可視の世界を描いた部分は、かなり史実に基づいている。たとえば警察総監パウロ・フェルナンジス・ヴィアーナは実在の人物であり、またベルナルド・ロウレンソ・ヴィアーナという奴隷商人も実在している [SlaveVoyages.org]。そして登場人物ジョアキーナ・

ラピーニャも、当時の黒人女性オペラ歌手として歴史に名を残している。さらに作中では、19世紀のリオを訪れた外国人の記録に基づいたヴァロンゴの描写が丁寧に再現されている [LESSA, TAVARES, RODRIGUES-CARVALHO]。つまりクルスは、歴史的事実をふましつつ、そこに排除された視点を補い、新たな「もうひとつの歴史」を描こうとしているのだ。クルスはあるインタビューで、ブラジルの歴史と記憶について次のように述べている。

私たちはブラジルで、歴史と記憶に関して大きな問題を抱えています。私たちは、自分たちの本当の過去についてあまり知らないのです。歴史と言えば、それは植民者によって語られたものであり、奴隷制を敷いた者たち、たくさんのカッコが付いた「勝者」のものなのです。(…)つまり私たち自身については、多くの空白があり、解決されるべき問いや答えを必要とする問題がたくさんあるのです。こうして自分たちの歴史と切り離されていることが、多くの内面的なひびを生み、自己肯定感の問題や、未来への違和感を引き起こしているのです。[Ibid.] [傍点は筆者]

ここで指摘されているように、ブラジル史として語られているものは、奴隷制度を築いた支配者たちの視点によって構築されたものであり、奴隷とされた人々の視点は「空白」として切り捨てられてきた。クルスの文学は、まさにその空白を埋め、語られなかった歴史を取り戻す試みだと言える。インタビューではさらに、次のようにも語っている。

暗い部屋にいる人を想像してみてください。ぼんやりとした影は見えるけれど、どこが出口かきちんとわからない。私は、まさに今の状況がそれに似ていると感じています。そして、私が書く文学は——いや、私だけではなく、いま多くの人々が手がけている文学は——その薄暗い部屋に、小さな光を灯すようなものなのです。[Ibid.]

つまり『ヴァロンゴ埠頭の犯罪』は、ブラジル史に存在する「空白」を照らし出す「光」として書かれた小説である。その目的は、数世紀にもわたりポルトガルや他のヨーロッパ諸国が犯してきた奴隷制度および大西洋奴隷貿易という人類史上最大級の犯罪を可視化し、さらに合理主義を絶対視し、非西洋的伝統や価値体系を排除してきた、西洋中心的な認識論的枠組みそのものへの批判である。クルスは次のようにも述べている。

私たちは、文学に大きく基づいた集団的記憶を持っています。けれどもそれは時に、望ましくない働きをすることもあります。なぜなら、文学が認識やステレオタイプ、ナラティブを固定化し、人々を特定の場所や立場に閉じ込めてしまうことがあるからです。言語とは、文化が根づく場所です。存在のためにとっても重要な場所です。だから、私たちはその場を手放すわけにはいきません。というのも、もし私たちが最低限の尊厳を持って歴史に登場したいのであれば、この言語という領域、言語の生産という営みを自らのものとしてしっかりと手中に収めなければならないからです。[Revista Continente]

そして「私が何よりも望んでいることは私たちの歴史を再考すること」[ibid.] だと述べ

ている。

本作は、推理小説の形式に則ってはいるものの、その標準から大きく逸脱する点が多い。だが、それは決して欠陥ではない。むしろ推理小説という近代的・合理的な文学形式を「鏡」として活用することによって、ポルトガルをはじめとする西洋列強がブラジルという舞台で犯してきた歴史的暴力の構造を浮き彫りにし、同時に、合理性の枠ではとらえきれないアフリカの神秘と霊的世界の豊かさを生き生きと描き出すことに成功している。

以上見てきたように、『ヴァロンゴ埠頭の犯罪』は、推理小説という近代合理主義的形式を借用しつつ、それ自体を乗り越える試みとして、語られざる歴史や霊的知の復権を描き出している。そこにこそ、本作が提示する「もうひとつの歴史と真相」がある。

別表

捜査過程	事件に直接関連する記述の概要
1. 捜査	総監が現場検証。総監は、犯行がこの数日に行なわれ、3人の奴隷は事件現場からは遠く離れたところにいたことには気を留めた。ヌーノは総監が、黒人は主人に恨みを抱き、動機があるため、最初の容疑は常に黒人にかかるかと断言したと聞いた。
2. 捜査： 第一の手がかり	3人の奴隷を警察で取り調べたが、顔色一つ変えず落ちついてた。死体の異常な状況に対し、ムアーナは悪党の仕業だと答えた。ベルナルドに近づくと皆敵になるとマリアンノは思ったが言いたかったが、ホーザは幼少期からベルナルドの所有だと言った。キルトについて訊かれ、マリアンノは裁縫は得意だと答えた。
3. 捜査： 第二の手がかり	<ul style="list-style-type: none"> ・ヌーノは巨大なキルトが呪術と関係があり、超自然的なことが起こったと思いたい誘惑に駆られていた。総監にいくつか超自然的な話をしたら、少なくとも少しは引っかかったようだ。 ・ベルナルドはエメレンシアーナの19歳の誕生日を祝い、プロポーズをする祝賀会を催すことにし、その準備のためにヴァロンゴの宿屋を閉めて、3人の黒人奴隷を連れて別荘に趣いたらしい。その翌日エメレンシアーナとベルナルドらは街に戻ったが、3人の黒人は片付けのためにそのまま別荘に残るよう命を受け、そのようにした。だがヴァロンゴに着いたときベルナルドはおらず、その日にベルナルドの死体が発見された。 ・総監はなぜベルナルドの小指が切り落とされたのが見当もつかなかった。
4. 捜査： 容疑者	容疑者はだれか総監に訊かれ、「あの脂ぎった、けち臭い、詐欺まがいのゆすり屋で、怒り散らす残院な恥知らずのベルナルドのことだから、リオデジャネイロ全体だ」とヌーノは答えた。ヌーノも含まれるかと訊かれ、一瞬たじろいだが、それは総監も同様だし、自分には人の腹を突き刺したり、指を切断したり、ズボンを下ろして男根を切り落とす勇氣はないと答えた。

<p>5. 捜査： 第三の手がかり</p>	<p>総監が不意打ちで宿屋を訪ね3人の奴隷の取り調べを実施。護衛士官とヌーノが同行した。ベルナルドの遺品の競売終了まで3人は宿屋を離れられないことを告げられた。炊事場のナイフのコレクションを見て、ヌーノは「ベルナルドがパッチワークのキルトに包まれた状態でみつかったことや、身体の2か所が欠損し、腹には短剣が突き刺さっていた」ことを連想した。</p>
<p>6. 最初の結論</p>	<p>取り調べに当たった3人はホーザの料理を食べ、総監と衛兵士官は意識朦朧となっていた。ヌーノは自分に不利になる借用証書をベルナルドから取り返すためにこっそり書齋へ向かうが、奴隷たちに先回りされ、その借用書と引き換えに、ムアーナの手記を保管することを約束させられる。またムアーナは自分が死者と話せるという。こうしたことからヌーノは「彼ら3人は、長官よりも力を持っている」と結論づけた。</p>
<p>7. 第二の結論</p>	<p>マリアンノは「私はベルナルド・ロウレンソ氏を殺した」と自白。ベルナルドが路地に倒れているのを見て、キルトを取りに走り、死体を包んだ。そのキルトは彼を殺すために作っていたもので、身長の高さになったら彼は死ぬことになっていた。ホーザは、自分の体内に入ってきた武器ペニスを切断し、自分の料理を食べた腹に短剣を突き刺した。ムアーナも「私も殺しました」と言い、ベルナルドがほかの人たちに差し向けた運命をベルナルド本人にも負わせるべく、小指を切断したと言った。</p>
<p>8. 第三の結論</p>	<p>総監と護衛士官は一晩中眠り、ヌーノは大地と異界の間をさまよった。士官は前夜の食事を含め何も記憶がない。ヌーノはホーザの料理による麻痺状態から回復後、取り調べ時の3人の奴隷の冷静さを思い出し、「人は見かけによらない（誰も見かけ通りではない）」と結論づける。</p>
<p>9. 最後の結論</p>	<p>結論としては、明白で常識的なものと洗練された物を得た。前者は、エメンシアーナの例から得たもので「すべてを欲する者はすべてを失う」ということ、後者は『ハムレット』の一節「There are more things in heaven and earth, Horatio, than are dreamt of in your philosophy.」で言われていること。</p>

註

- 1 *O crime do Valongo* からの引用にはページ数を括弧に入れて記す。
- 2 警察行政と都市の秩序維持を担う高官。ただし当時のブラジルには「警察庁」のような独立機関はなく、行政の一部門として機能していた。
- 3 推理小説のほかに探偵小説という言葉も用いられるが、これは同じものを指す（フランス語ではいずれも *roman policier*）という [小倉 2002:084]。本論では同類のものとして扱った。
- 4 Uzêda[2018] も「この作品は「探偵小説」に分類され、「犯罪」とその犯人を暴くための捜査、つまり商人ベルナルド・ロウレンソ・ヴィアンナの残忍な殺人事件を中心に物語が展開することを考えれば、それは当然のことである」と述べている。
- 5 この構図を推理小説ないしは探偵小説の技法や構造として捉える研究者や作家はほかにもいる。フリーマンは「探偵小説のプロットとは、実は小説の体裁をとった推理にほかならない。(…) 作品の構成はつぎのような順序に落ち着くことが多い。(1) 問題の設定 (2) 解決に必要なデータ (手がかり) の提示。(3) 問題解決、すなわち探偵による調査の完了と解決宣言 (4) 証拠の提示による解答の証明」だと述べている [鈴木 1976:12]。また江戸川乱歩は、「探偵小説とは、主として犯罪に関する難解な秘密が、論理的に、徐々に解かれて行く経路の面白さを主眼とする文学である」と定義しているという [内田 2001:8]。
- 6 江戸川乱歩も「探偵小説とは、主として犯罪に関する難解な秘密が、論理的に、徐々に解かれていく経路の面白さを主眼とする文学である」と書いている。[江戸川 1979]
- 7 たとえばノックスの十戒には「あらゆる超自然的な要因は、当然のことながら、物語に持ち込まれるべきではない」(ロナルド・A・ノックス) [鈴木 1976: 140] とあり、S・S・ヴァン・ダインも「犯罪の謎は、現世に自然律に則った方法によって、解決されねばならない。真相を明かすために、瓦占い、霊応盤、読心術、降霊術、水晶占いなどの方法を用いることはタブーである。読者が理性的推理力のある探偵と、知恵くらべを行なう場合にこそ、読者の勝ち目も出てくるわけで、もしそれが霊界との競争(…) なら、最初から読者は負けと決まっているからである」としている [鈴木 1976: 131]。
- 8 1500年から1867年の間にアフリカからアメリカ大陸へ奴隷として連れ出された人は12,521,337人とされており、そのうち約500万人がブラジルへ送られたことが、近年の研究で明らかになっている。この数字は全体の約40%にあたる。そしてそのうちの約230万人、すなわち半数近くがブラジル南東部、特にリオ、サンパウロ、ミナスジェライスへ送られ、サトウキビやコーヒーのプランテーション、金やダイヤモンドの採掘現場で酷使された [GOMES 2019: 255-260]。18世紀にはリオがアメリカ最大の奴隷貿易の拠点となり、その影響で人口構成も大きく変化し、1821年には市内人口の46%、地方部を含めると49%が奴隷だった [HONORATO 2008: 45]。
- 9 この節の最後の2段落の情報はNARA(2023)、HONORATO(2008)、LESSA/TAVARES/RODRIGUES-CARVALHO(2018)を参考にした。
- 10 *reis*: 長期にわたって使われたポルトガル・ブラジルの基本通貨単位。 *pataca*: 1695～1834年に銀貨シリーズで流通した通貨。 *dobrão*: 18世紀に発行された高額な金貨。
- 11 *Possuir sexualmente; seduzir.* [Houaiss]
- 12 ヴァロンゴ埠頭はリオの奴隷上陸港として1811年に整備され、1831年の奴隷貿易禁止法で公式には廃止された。1843年、皇帝ペドロ二世の花嫁テレーザ・クリスティーナを迎えるため、かつて奴隷港だったヴァロンゴ埠頭が改修・美装化された。奴隷港の痕跡は地中に埋められ、歴史の中に葬り去られた。
- 13 この指摘は本作に関する多くの書評や論文等で指摘され、通説になっており、執筆者の発見ではない。
- 14 原語は *Feliz Dia*

参考文献

外国語文献

※以下に記載された URL は、特記のない限り 2026 年 3 月 2 日現在有効。

- ALTUNA, P. Raul Ruiz de Asúa (1985) *Cultura tradicional banta. Luanda*, Secretariado Arquidiocesano de Pastoral.
- CRUZ, Eliana Alves de (2018) *O crime do Cais do Valongo*, Malê.
- HONORATO, Cláudio de Paula (2008) “Valongo: O mercado de escravos do Rio de Janeiro”, 1758-1831. Dissertação (Mestrado) – Universidade Federal fluminense, Instituto de Ciências Humanas e Filosofia, Departamento de História.
- HOUAISS, Antonio et al. *Dicionário Houaiss da língua portuguesa* 1ª edição. Rio de Janeiro: Editora Objetiva.
- LESSA, Andrea/TAVARES, Reinaldo/RODRIGUES-CARVALHO, Claudia. (2018) “Paisagem, morte e controle social: o Valongo e o Cemitério dos Pretos Novos no contexto escravocrata do Rio de Janeiro nos séculos XVIII e XIX”, *Paisagem Híbridasbridas*, Vol. I - N.1 https://www.researchgate.net/publication/329842352_PAISAGEM_MORTE_E_CONTROLE_SOCIAL_O_VALONGO_E_O_CEMITERIO_DOS_PRETOS_NOVOS_NO_CONTEXTO_ESCRAVOCRATA_DO_RIO_DE_JANEIRO_NOS_SECULOS_XVIII_E_XIX
- LOPES, Nei(2023) *Banto, malês e identidade negra* 4ª ed. Rev. e atual; 2. reimp., Belo Horizonte: Autêntica.
- MALANDRINO, Brígida Carla (2010) “Os mortos estão vivos: a influência dos defuntos na vida familiar segundo a tradição Bantú”, *Último Andar*, (19), 40–51. Recuperado de <https://revistas.pucsp.br/index.php/ultimoandar/article/view/13305>
- MATIAS, José Luiz “O crime do Cais do Valongo: quando a saga da diversidade negra se projeta para a contemporaneidade”, *Fórum de Literatura Brasileira Contemporânea*. 11. <https://doi.org/10.35520/flbc.2019.v11n22a31043>
- NARA JR., João Carlos; SANTOS, Andressa Ramos dos(2023) “Dossiê sobre o Cais do Valongo in Hemeroteca Digital Brasileira”, *Freguesia de Santa Rita do Rio de Janeiro*. <https://santarita.hypotheses.org/3856>
- SILVA, Julio Menezes (2018) “Livro 'O crime do Cais do Valongo', por Luiz Antônio Simas”, 04/06/2018, IPEAFRO. <https://ipeafro.org.br/livro-o-crime-do-cais-do-valongo-por-luiz-antonio-simas/>
- SILVA, Rafael Batista da (2022) “Reconstrução do ser negro: mem(Óri)as e histórias em O(s) crime(s) do Cais do Valongo, de Eliana Alves Cruz”. Dissertação (mestrado). Rio de Janeiro: Universidade do Estado do Rio de Janeiro, Instituto de Letras. <https://www.bdtd.uerj.br:8443/handle/1/18474>
- SIMAS, Luiz Antonio (2018) “O crime do Cais do Valongo é literatura de melhor qualidade”, *liteafro*. <http://www.lettras.ufmg.br/liteafro/resenhas/ficcao/1189-o-crime-do-cais-do-valongo-e-literatura-da-melhor-qualidade>
- SIMAS, Luiz Antonio (2024) *Umbandas: uma história do Brasil* 9ª ed. Rio de Janeiro: Civilização Brasileira.
- UZÊDA, André Luís Mourão de (2019) “Eliana Alvez Cruz -- Crime do Cais do Valongo”. Rio de Janeiro: Malê, 2018. *Estudos de Literatura Brasileira Contemporânea*. https://www.researchgate.net/publication/334060067_Eliana_Alves_Cruz_-_O_crime_do_Cais_do_Valongo_Rio_de_Janeiro_Male_2018

日本語文献

- 内田隆三 (2001) 『探偵小説の社会学』、岩波書店。
- 江戸川乱歩 (1979) 『江戸川乱歩 全集 第18巻 幻影城』、講談社。

小倉孝誠 (2002) 『推理小説の源流』、淡交社。

鈴木幸夫 (編訳) (1976) 『推理小説の詩学』、研究社。

武田千香 (2020) 「神秘のミステリー小説『ヴァロンゴ棧橋の犯罪』—真犯人はだれだ?」、『総合文化研究』
第24号、東京外国語大学総合文化研究所。

ヘイクラフト、ハワード、林俊一郎訳 (1992) 『娯楽としての殺人』、国書刊行会。

WEB 記事

Hypotheses, “Ecos do Valongo: 3 livros que revelam a história silenciosa do tráfico negreiro no Rio de Janeiro” ,
<https://santarita.hypotheses.org/4106>

Jornal Opção, “Escritora Eliana Alves Cruz revela um crime e resgata passado histórico brasileiro” , 17/10/2020
<https://www.jornalopcao.com.br/opcao-cultural/escritora-eliana-alves-cruz-revela-um-crime-e-resgata-passado-historico-brasileiro-187383/>

liteafro - o portal da literatura afro-brasileira, “Eliana Alves Cruz” , dados biográficos. <http://www.letras.ufmg.br/liteafro/autoras/1159-eliana-alves-cruz>

WEB サイト

Slave Voyages Database, Voyage ID #19345 (1810年、バダグリ／アパ発りオデジャネイロ行)、および
Voyage ID #7045 (1812年、ラゴス発りオデジャネイロ行)、航海関与者：Bernardo Lourenço Viana。
SlaveVoyages.org、<https://www.slavevoyages.org/>

Viajando na história do Rio de Janeiro, “Bairros da zona portuária e a história de algumas atrações turísticas” , 7 de
mar. De 2023 <https://www.viajandopelahistoriadoriodejaneiro.com/post/bairros-da-zona-portu%C3%A1ria-e-a-hist%C3%B3ria-de-algumas-atra%C3%A7%C3%B5es-tur%C3%A1sticas>

インタビュー

Observatório de favelas, “Esperando o futuro da literatura e da inclusão racial no Brasil: Entrevista com Eliana Alves
Cruz” , por Isabella Rodrigues, novembro 9, 2023. <https://observatoriodefavelas.org.br/esperando-o-futuro-da-literatura-e-da-inclusao-racial-no-brasil-entrevista-com-eliana-alves-cruz/>

Revista Continente, Entrevista, “É um projeto literário que fala muito sobre a liberdade” , TEXTO Yuri Euzébio, 05 de
Dezembro de 2022, Continente, Diário Oficial do Estado de Pernambuco, <https://revistacontinente.com.br/secoes/entrevista/re-um-projeto-literario-que-fala-muito-sobre-a-liberdader>

Beyond Detective Fiction: Memory, History, and Spiritual Knowledge in *O Crime do Cais do Valongo*

Chika Takeda

Summary

This paper analyzes *O Crime do Cais do Valongo* by Eliana Alves Cruz, demonstrating that the novel is not merely a detective story but a historical and social commentary on the realities of nineteenth-century slavery in Brazil.

Set in early 19th-century Rio de Janeiro, the story revolves around the investigation of the murder of Bernardo Lourenço Vianna, a businessman and slave trader, in the port district of Valongo. While the investigation is led by the Intendente-Geral da Polícia and his assistant Nuno, the narrative deviates from conventional detective fiction, lacking logical deduction and structured mystery-solving. Though three enslaved individuals confess to the crime, they were only involved in the desecration of the corpse. The true perpetrator—a white aristocrat—is revealed only through a vision experienced by Muana, one of the enslaved characters, in her spiritual form. Their desecration of Bernardo’s corpse is an act of symbolic revenge against years of abuse.

The novel highlights the historical significance of Valongo, one of the most important slave landing sites in the Americas, where countless African captives suffered and perished. It argues that the real crime of the Cais do Valongo is not the murder at the center of the plot, but slavery itself—the institutionalized system of violence, exploitation, and dehumanization imposed by the Portuguese Empire on its Brazilian colony, and later continued by independent Brazil until the abolition of slavery in 1888. By framing slavery as the true crime, the novel denounces not only individual acts of brutality but also the legal and colonial structures that sustained them. It serves as an effort to reclaim the memory of slavery and confront Brazil’s historical amnesia.

Additionally, the story integrates Bantu cosmology, in which the spirits of the dead coexist with the living. Through the perspective of Muana, an enslaved woman, the novel emphasizes the importance of allowing the victims of the slave trade to return to their ancestral realm—a symbolic reparation that transcends the material world.

Furthermore, the novel may also be read as a critique of the epistemological framework of Western-centrism, which absolutizes rationalism while excluding non-Western traditions and systems of value.

Ultimately, the paper asserts that while the novel adopts the form of detective fiction, its true purpose is to expose the history of slavery, not to solve a crime. Cruz uses this literary framework to fill the gaps in Brazil’s historical narrative, shedding light on history from the perspective of the oppressed rather than the colonizers.

キーワード

ブラジル文学 アフロブラジル 奴隷制 アフリカ系文学 霊性

Key words

Brazilian literature Afro-Brazilian slavery African-descendant literature
spirituality